幼稚園教育と小学校低学年教育の連携に関する考察
－Wahl-Coates Elementary School における Grade K 及び Grade 1 の教育活動の観察を通して－

広島大学附属三原小学校　教諭　　石　井　信　孝

1．はじめに

生活科の誕生の背景の一つに幼稚園教育（就学前教育）と小学校低学年の教育の接続・発展を考慮することがあげられる。これは、園児と小学校低学年の児童は、ともに具体的な活動や体験を通して思考するという発達段階にあるととらえられるからである。生活科には、幼稚園の保育活動と小学校の学習活動のギャップをうめていくという意図が込められている。

日本では、幼稚園は幼稚園教育要領にもとづき、環境を通した保育が展開され、小学校は小学校学習指導要領にもとづき、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの中で学習活動が行われている。しかし、North Carolina では、Standard Course of Study の中に、Grade K から Grade12までが記述され、Grade K も他の Grade と同じように教科が設定されている。Grade K 及び Grade 1の教育活動の実際を見ることを通して、生活科の活動内容のあり方、小学校低学年の教育活動のあり方、就学前教育と小学校教育の連携のあり方についての、改善の視点や具体的な事例を得たいと考える。

2．研究の概要

(1) 研究の目的

アメリカでのGrade K 及び Grade 1の教育活動を調査することによって、今後の日本の小学校低学年の教育活動のあり方、就学前教育と小学校教育の連携のあり方を探る。

(2) 研究の方法

ア．North Carolina Standard Course of Studyによる、Grade K、Grade 1のカリキュラムの概要を把握する。

イ．Grade K と Grade 1を中心に、アメリカの教育活動を観察する。

ウ．アメリカの教師（Grade K、Grade 1を中心に）へのアンケート及びインタビューを行う。

(3) 現地調査の日程

日　時	場　所	内　容	関係者・関係機関（所属・所在地・連絡先等）
8/20（火） 8：00- 8：15	Wahl-Coates Elementary School	Wahl-Coates Elementary School での、参観スケジュールの確認及びアンケートインタビューの依頼の確認	Lavet Weatherington (Art)
8/21（水） 7：50- 8：15 8：15- 8：55 9：00- 9：50 9：50-10：15 10：20-10：40 10：40-11：40 11：40-12：00 12：00-12：30	Wahl-Coates Elementary School	(Grade 1のMiller先生のクラスの参観) 始業前の様子の参観 体育の授業参観 朝会及び算数の授業参観 休憩時間の様子の参観 筆者の自己紹介など 国語の授業参観 筆者製作のおもちゃの紹介 子どもたちとともに昼食	Betty Miller （1 st） Erika Dawson （PE） Brain Dilday （PE）
8/22（木） 7：40- 8：15 8：15- 8：55 9：00- 9：50	Wahl-Coates Elementary School	(Grade K の Stefko 先生のクラスの参観) 始業前の様子の参観 朝会及び算数の授業参観 音楽の授業参観	Karin Stefko（K） Edie Snider（Music） Paula Nelson（K） Ashley Smith（2nd）

9 : 50-10 : 00 10 : 20-10 : 40 10 : 40-11 : 05 11 : 05-11 : 40 12 : 00-12 : 10 12 : 10-12 : 20 12 : 30-12 : 50 13 : 10-14 : 00 14 : 45-15 : 05		音楽の先生にインタビュー 国語の授業の参観 ワークステーションでの活動の参観 子どもたちとともに昼食 ストーリータイムの参観 筆者製作のおもちゃの紹介 他のKのクラスの参観 ２学年社会科の授業参観 Kの活動についてStefko先生にインタビュー	
8/23（金） 7 : 45- 8 : 15 8 : 20- 8 : 55 9 : 00- 9 : 50 10 : 50-11 : 25 11 : 30-12 : 00 12 : 15-12 : 45 13 : 30-14 : 00 14 : 00-14 : 15	Wahl-Coates Elementary School	(Grade 1の Marshall 先生のクラスの参観) 始業前の様子の参観 １学年担当の先生方にインタビュー 朝会及び算数の授業参観 Miller先生のクラスとの合同授業の参観（国語） 図書の授業の参観 子どもたちとともに昼食 読書の様子を参観 Unit Studyの参観	Lisa Marshall（1 st） Betty Miller （1 st） Mahala Myrick（1 st） Carrie Thornton（1 st） Patricia Mcarthur （1 st） Sharon Phillips (Media)

※関係者は、全てWahl-Coates Elementary Schoolのスタッフである。
住所：2200E Fifth Street Greenville, NC 27858
電話：252-752-2514

3．研究の結果と考察

(1) Grade K と Grade 1 の教育活動の概観

ア．時間割

Grade K	Grade 1
(Miss Stefco's Class)	(Mrs. Marshall's Class)
7 : 30- 8 : 00 Arrival	7 : 30- 8 : 00 Arrival
8 : 00- 8 : 15 School Announcement	8 : 00- 8 : 15 School Announcement
8 : 15- 8 : 35 Family Time	8 : 15- 8 : 55 Special Class※
8 : 35- 8 : 55 Math	8 : 55- 9 : 20 Morning Meeting
9 : 00- 9 : 40 Special Class※	9 : 20- 9 : 50 Math
9 : 45-10 : 15 Snack & Morning Exercise	9 : 50-10 : 00 Snack
10 : 15-10 : 30 Language Arts	10 : 00-11 : 00 Guided Reading
10 : 30-11 : 00 Workshops (small group instruction)	
11 : 10-11 : 40 Lunch	11 : 00-11 : 30 Working With Words
11 : 45-12 : 00 Shared Reading & Word Work	11 : 30-12 : 15 Writing
12 : 00-12 : 20 Story Time	12 : 15-12 : 45 Lunch
12 : 30- 1 : 00 Rest	12 : 45- 1 : 00 Recess
1 : 00- 1 : 15 Pack	1 : 00- 1 : 10 Read Aloud
1 : 15- 1 : 35 Unit Study : Social Studies/Science	1 : 10- 1 : 40 Self Selected Reading
1 : 40- 2 : 00 Outside Play	1 : 40- 2 : 10 Unit Study : Social Studies/Science
2 : 00- 2 : 10 Review Day	2 : 10- 2 : 20 Pack
2 : 15- 2 : 20 Dismissal	2 : 20 Dismissal
※Special Classes Mon－P. E, Tue－P. E, Wed－Library Thur－Music, Fri－Art	※Special Classes Mon－Library, Tue－P. E, Wed－Art, Thur－P. E, Fri－Music

	Grade K	Grade 1
共通点	○チャイムは鳴らないが、ほぼスケジュールのとおりに活動を行う。 ○教科の構成は、ほぼ同じで、午前中に算数、国語に関連した内容を行う。 ○午後のUnit Studyで、社会科、理科に関する内容を学習する。	
相違点	○Workshopsの時間が設定されており、毎日小グループでWorkstationsでの活動を行う。 ○午後に昼寝の時間をとる。	○週に1回は、2クラス合同の授業を行う。

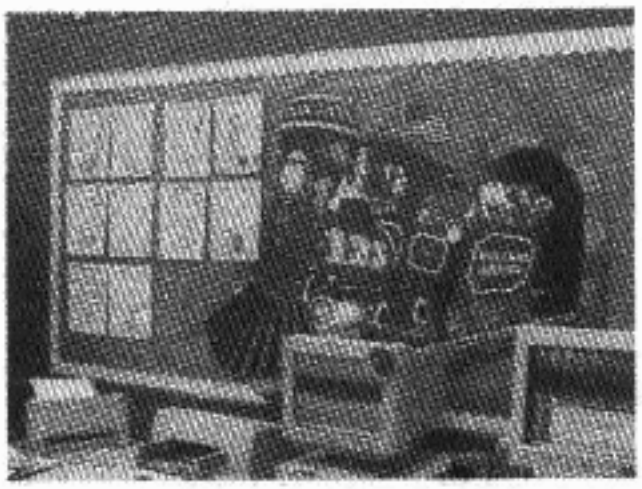
イ．学級の子どもの数

Grade K，Grade 1ともに、およそ20名。

ウ．スタッフの数

Grade K、Grade 1ともに、基本的には担任とアシスタントの2名。保護者等のボランティアが日常的に入る。

エ．教室の環境構成

	Grade K	Grade 1
共通点	○人数に対して部屋が広く、カーペットが敷き詰められ、どこでもすわって活動ができる。 ○鮮やかな色やかわいらしいキャラクターの掲示物やディスプレイが、楽しい気持ちにさせる。 ○数、形、色、アルファベット、単語などに関する掲示物が、学習活動に関連するコーナーに貼られている。 ○エアコンで快適な温度に設定されている。	
相違点	○一人ひとり専用の机はない。 ○Work Stationごとに、子どもたちが興味・関心を抱いて活動できるように、学習材や掲示物、テーブルなどが設定されている。 （Work Stationの例：Writing, Blocks, Puzzles, Math, Computer, Topical, Housekeeping, Creation, Stitch等） Workshopの時間：Writingのコーナーでアシスタントの先生の指示を受けての活動 誰がどのコーナーの活動を達成しているか分かるようにしている。	○日本の小学校と同じように、子ども一人ひとりの児童机がある。 ○Grade KのWork Stationほどではないが、ロッカーやテーブルなどの配置によって、本を読むコーナー、コンピューターのコーナー、算数のコーナーなどが設けられ、子どもたちが関連する学習材や掲示物に自然にふれることができるようにしてある。  コンピューターのコーナー Mathのコーナーの学習材

(2) 考察

Ⅰ. Wahl-Coates Elementary Schoolと

日本の幼稚園・小学校の比較

	Wahl-Coates E. S. Grade K	幼稚園（年長）
共通点	○鮮やかな色やかわいらしいキャラクターの掲示物やディスプレイが、楽しい気持ちにさせる。 ○一人ずつに専用の机はない。 ○手に取り遊ぶ中で学習できるように、様々な学習材が置かれている。 ○歌をうたったり、手遊び歌を行ったりする。	
相違点	○教科学習の基礎を養うことがねらわれており、教科の枠は、Grade 1と同じ。 ○時間割が決まっている。また、子どもたちだけで自由に遊ぶ時間はない。 ○教室での活動が主で、椅子に座って静かに活動する。 ○17人の子どもに、3人のスタッフ。（担任1名、アシスタント1名、大学からのインターン1名）	○遊びを中心として生活を通して総合的な指導を行う。 ○好きな遊びをみつけて遊ぶ活動のしめる割合が高く、子どもの主体性を重視している。 ○身近な自然とのふれあいを重視し、園庭で遊ぶことが多い。 ○35人の子どもに、1人のスタッフ。

	Wahl-Coates E. S. Grade 1	小学校　1学年
共通点	○時間割にそって活動する。 ○児童机が一人ずつに決められている。 ○児童机に大きな文字の名札が貼ってある。 ○朝の会で、出欠を確認したり歌をうたったりする。 ○算数の学習で、操作活動を行う。	
相違点	○Unit Studyと言語の学習が、ねらいを明確にしたうえで、具体的な活動で関連づけられている。 ○1年生では、教師用の大きな教科書を使うことが多い。児童用のものは、貸与される。日本のものと比較してページ数が多い。 ○人数に対して部屋が広く、カーペットが敷き詰められ、どこでもすわって活動ができる。また、児童机以外にテーブルや学習に関連するコーナーがある。 ○屋外で遊ぶ際も、教師の監督の下に遊ぶ。 ○20人の子どもに、2人のスタッフ。 ○担任は、長年同一の教室で、同一の学年を教える。	○指導要領の生活科に「国語、音楽、図画工作など他教科等との関連を図り、指導の効果を高めるようにすること」と記述されている。 ○児童用の教科書は、無償で供与される。 ○児童机だけで教室がいっぱいになり、学習コーナーを設置することはむずかしい。床はビータイルであり、座っての活動には適さない。 ○休憩時間は、子どもたちが自由に遊ぶ。 ○40人の子どもに、1人のスタッフ。 ○担任が、同一の教室で同一の学年を続けて教えることは、稀である。

Ⅱ. Grade KとGrade 1の学習内容・学習活動の特徴

①有機的に関連付けられた教育活動

Wahl-Coates ESでの教育活動を参観する際、当初は何の教科の学習を行っているのか戸惑うことがあったが、観察を続け先生方に質問をする中で、様々な活動が意図的・計画的に関連付けられていることが分かった。

新年度2週間目ということもあろうが、Grade Kでは、主に学校生活と教科内容が関連付けられており、Grade 1では、教科間の関連付けがなされていた。

ア. 学校生活と教科内容の関連付け（Grade K）

日本の小学校では朝の会で、歌を歌ったり、健康観察や連絡がなされたりしている。Wahl-Coates E. S. でも、Grade KではFamily Timeで、Grade 1ではMorning Meetingで、朝の会のような活動が行われていた。そして、日付を確認したり出席を取ったりする際に、数・形・グラフ、天候などの学習を行っていた。

Grade Kでは、通学の際の交通ルールと関連させて、Workshopsの中で、スクールバスが印刷されたプリントに色をぬったり、信号を作ったりしていた。また、Readingの時間には、スクールバスでの過ごし方の本を読み聞かせていた。

イ. 教科間の関連付け（Grade 1）

Unit Studyは、Grade 1においては、1週間を単位にテーマを決めて行われている。その内容は、社

Grade K（Family Time から自然な流れでMathの学習を行う。）
　出席している子どもの数をネームプレートでともに数え、その後実際に子どもの数を数える。カードの数と実際の人数が同じであることを確認する。
　その日の天気について話をし、グラフに書き込む。
　小学校に入学して９日目だという話題から、９の数字の書き方を練習する。

会科と理科をほぼ交互に行っている。このUnit studyとLanguage Art を関連させ、それぞれの学習内容の目標を位置づけて計画をしている。（表－１、２参照）

表－１

Grade Level Timeline

Grade 1　Marking Period: 1　Subject: Unit

Beginning/Ending Date	Theme	Objective #	Additional Info
August 12-16	Beam/Rules	1.1, 1.2, 1.3, 1.4, 8.4, 4.3	
August 19-23	All About Me	3.1, 3.2, 3.3, 6.1	
August 26-30	Five Senses	1.2	
September 3-6	Family	8.2, 8.3, 2.1, 2.2	Grandparent's Day Sept. 6
September 9-13	Seasons	6.3	
September 16-20	Farm Animals	1.2, 1.3, 1.4	
September 23-27	Apples	1.1, 1.3	Johnny Appleseed Bday September 26
September 30- October 4	Community Helpers	5.2, 5.3, 4.1, 6.5	
October 7- 11	Fire Safety	5.2, 7.2	

表－２

Grade Level Timeline

Grade 1　Marking Period: 1　Subject: Communications (Big Books will be used to teach varying communication skills based on the week's theme.

Beginning/Ending Date	Theme	Objective #	Additional Info
August 12-16	Beam/Rules	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
August 19-23	All About Me	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
August 26-30	Five Senses	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
September 3-6	Family	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
September 9-13	Seasons	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
September 16-20	Farm Animals	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
September 23-27	Apples	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
September 30- October 4	Community Helpers	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	
October 7- 11	Fire Safety	1.1-1.5, 2.1-2.9, 3.1-3.7, 4.1-4.6, 5.1-5.6	

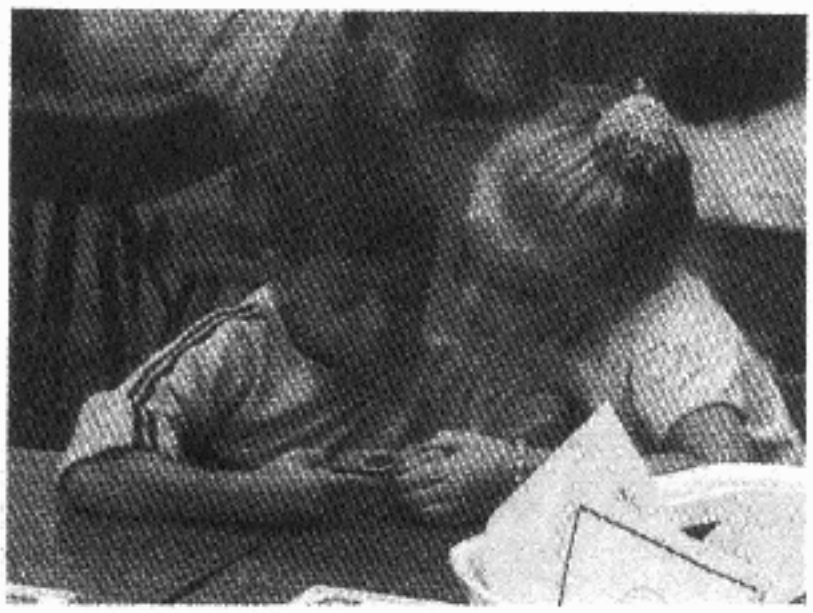
参観をした際は、「All About Me」をテーマに活動を行っていた。ここでは、自己理解とともにクラスメートのことも理解することを大きな目標に取り組んでいた。

Miller 先生のクラスでは、Reading の時間に「All About You」という本を読み聞かせながら、各自の家族構成、家の窓から見えるもの、好きな食べ物や遊びなどについて問いかけていた。その二日後に、子どもたちは自分の好きな絵を描いたりシールを貼ったりした紙袋に、好きなおもちゃやお菓子、好きな曲の入ったCD等を持ってきた。Working With Wordsの時間に子どもたちは、その袋を持って、隣のMarshall先生のクラスへ行き、隣のクラスの子どもとペアになり、お互いの好きなものを紹介しあった。（毎週１回は、２クラス合同で授業を行っている。）その後、子どもたちは、ペアのことについて作文をするWritingの活動を行っていった。

この日の午後,Marshall先生のクラスのUnit Studyの授業では、子どもたちはペアになって、虫眼鏡を使って自分の指と相手の指を見比べ、人によって指紋が違

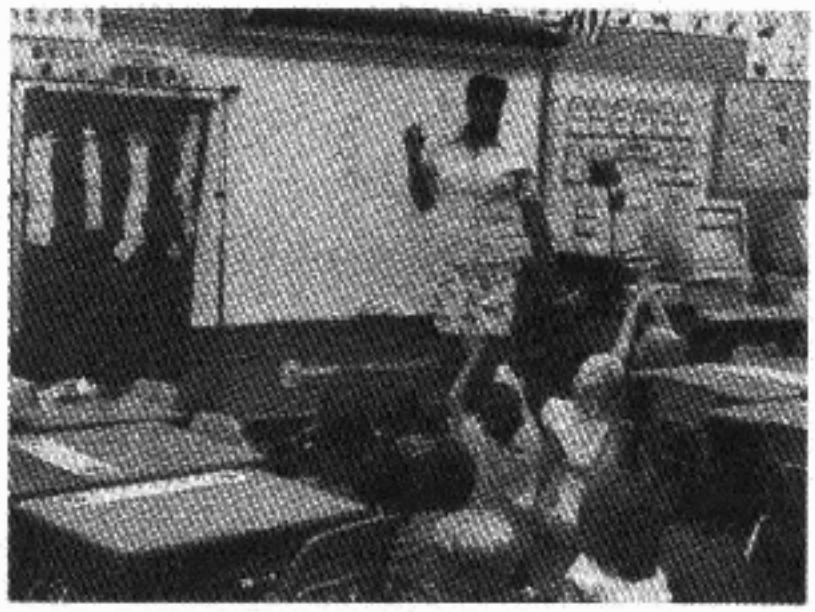
「All About You」の読み聞かせ
Readingの活動と関連

好きなものの紹介
Working With Words との関連



虫眼鏡を使ってペアと自分の指紋の比較
Unit Study の授業で

ペアのことについて作文
Writing の活動と関連



一組のペアを取り上げて相違点の整理
Unit Study の授業で

うことを見つけていた。さらに、二人の子どもを例にあげて、相違点を発表した。先生は、発表された内容を図に整理していた。

②学力の定着を図るための教育活動

ア．様々な場面でのアルファベットの指導

(Grade K)

○Family Timeで、アルファベットのカードを見せて、指名して発音させる。カードの裏に描かれたものを教師が範読し、続いて子どもたちが読む。

○音楽の時間に、2本のバトンを使ってリズム打ちをする。その際、2本のバトンでアルファベットを作る。

(Grade 1)

○図書の時間に、アルファベット順に花が並んでいる本の読み語りを聞く。手拍子を入れたり、リズムを変えたりして、ABCの歌を歌う。図書室の本の整理の仕方について習う。

(Grade KとGrade 1に共通)

バトンを作ってアルファベット作り

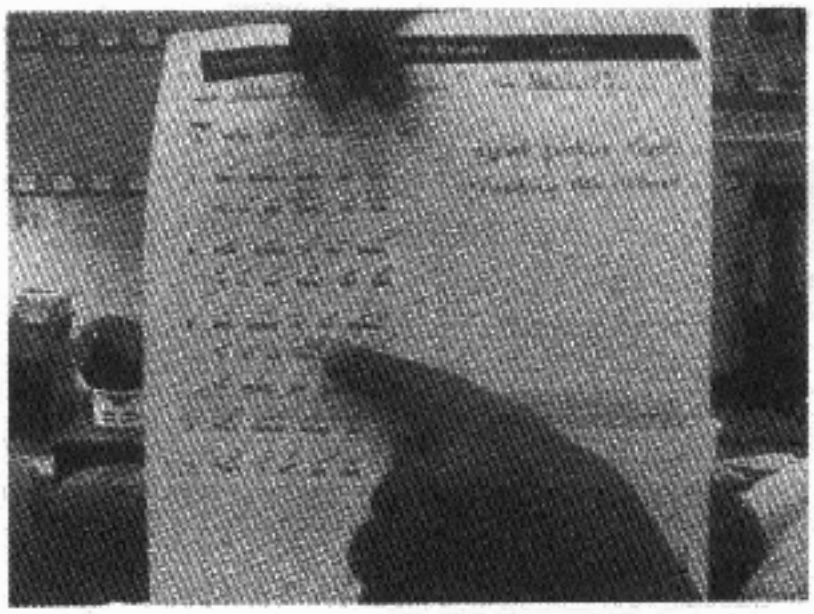
○アルファベットの書き順や各アルファベットで始まる言葉を集めたものを掲示している。

○正しい発音について様々な機会に指導している。

イ．客観的で明確な評価の設定と細かな指導を容易にする豊かなスタッフ・学習材

(Grade KとGrade 1に共通)

郡によって明確で細かな目標の設定がなされており、



子どもの reading を聞きながら、教師は一つずつの単語の発音をチェックしていく。

客観的な達成度を教師が把握することができる。そして、個々の子どものその時点での力に応じて学習材を個別に提供したり、アシスタントの先生が支援したりすることが可能である。

ウ．Thinking Maps（Grade KとGrade 1に共通）

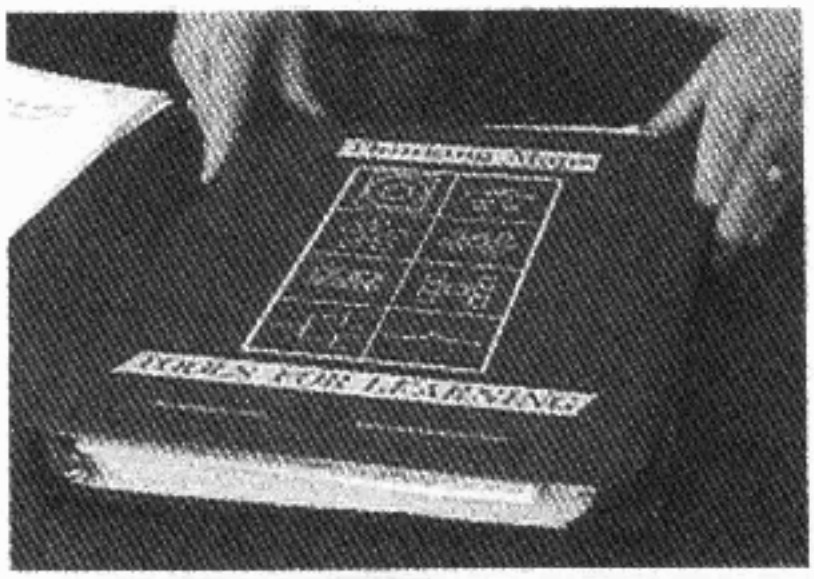
読み書き、計算だけでなく、物の考え方についても、系統だった指導が行われている。それは、Thinking Maps と呼ばれるもので、子どもたちが発想を広げたり、収束したりすることを手助けするとともに、分類、関連付けなど、どのような考え方をしているかという学び方そのものを学べるようにしている。今回、Grade 1の授業でも実際のこのThinking Mapsを使っている様子を見ることができた。シートに子どもたちが書き込むこともあれば、教師が板書することもあった。このThinking Mapsは、Grade 1からではなく、Grade Kの前のPre-Kにも対応するように作られている。

(4) 今後の展望

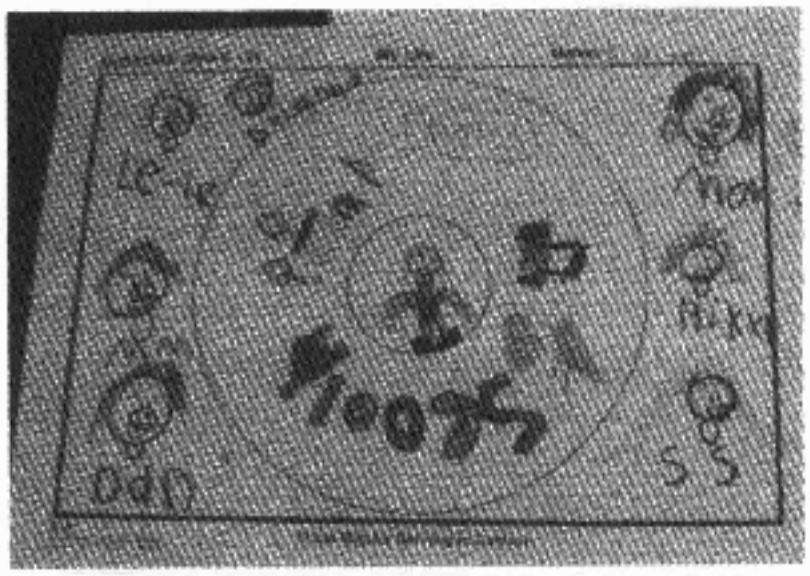
今回の観察を通して、Wahl-Coates E. S. では、人的にも物的にも環境が豊かであるということを感じた。それは、子ども一人にかかわるスタッフの多さや教室環境の整備という面だけでなく、読み書き算の評価や考え方の育成においても機能しやすいようにシステムが整備されているということである。

このことは、Unit StudyとLanguage Art の関連においても同様であった。日本の指導要領の生活科においては、「国語、音楽、図画工作など他教科等との関連を図り、指導の効果を高めるようにすること」と記述されているが、Wahl-Coates E. S. ではより具体的に、単元ごとにUnit studyとLanguage Art を関連させ、それぞれの学習内容の目標を位置づけて計画が立てられているのである。(3) でも述べたが、Unit Study と子どもたちの生活や言語の学習などが有機的に関連しており、生活科の学習、低学年の教育を考える際に、大変参考になる。

Grade K の子どもたちは、朝の会の中で言語、数、形などに関する学習をごく自然に学び、Workshop の時間には、Work Stationごとに個別または小集団で、パズル、ぬり絵、縫い物などの活動を楽しみながら行っ



Thinking Maps のマニュアル
講習を受けた先生が、学習したこと職場で分かち合っている



Thinking Maps の中のCircle Map と呼ばれるもの

ていた。Grade 1と違って、まだ学級全体での活動は少ないが（入学してまだ2週目ということもあり）、具体的な操作、活動を行ったり、身近な事柄から学習を進めたりしている点は共通していた。Grade K からGrade 1 に進級した際に子どもたちがスムースに生活をおくっていくことは充分納得できた。

(5) おわりに

Wahl-Coates E. S. を訪問する前は、小学校の中にKのクラスがあるということに興味をもち、Kや1年生のクラスを実際に見てみたいという思いが強かった。そして、実際に参観することによって、新たな疑問が浮かんできた。例えば、次のようなものである。

- Grade Kの前の段階、Pre-Kでは、どのような活動が行われているのか。
- 日本では、環境の変化に伴い身近な自然にふれることを大切にしてきているが、アメリカでは、どのようになされているのか。
- Standard Course of Study の Curriculum Area の内容と時間割の項目が一致していない。Curriculum Area にあげられている内容は、どのように扱われているのか。
- 普段の生活や Unit Study と関連した言語活動を見ることはできたが、文学作品の読み取りのような学習はいつごろからいかに行われているのか。
- 学校生活の中で、子ども同士のトラブルが生じないように教師は努めているが、人間関係能力をいかに養っているのか。

今回の訪問で、アメリカ、Wahl-Coates E. S. での教育活動を知りたいという気持ちが、より一層増した。これは、新年度の多忙な中にもかかわらず、あたたかく受け入れてくださった現地の先生方のおかげである。感謝の念に絶えない。

グローバル・パートナーシップの展開
－Exploris Middle School の訪問を通して－

広島大学附属東雲中学校　教諭　　柳　原　弘　典

1．はじめに

私が訪問した「Exploris Middle School」はノースカロライナ州の州都である「ラレー（Raleigh）」という人口約20万人の都市のほぼ中心部のダウンタウンに位置している。ラレーのダウンタウンには、「歴史博物館」「科学博物館」少し離れたところに「美術博物館」と多くの博物館があり、そこには子どもの学習に必要な資料が多く展示されており、恵まれた環境にある。

この「Exploris Middle School」（以後Exploris M. S. と略す）は「EXPLORIS」という博物館立のCHARTER SCHOOLである。

CHARTER SCHOOLはラレーに約５校、ノースカロライナ州にも約100校が存在し、新しい教育のスタイルを色々と試みる実験校的な存在である。

隣接する「EXPLORIS博物館」は子どもをメインの対象とした、GLOBAL（全世界の）をテーマに世界の国の文化や生活様式、世界の子どもの声などを紹介している。

Exploris M. S. は各学年２クラスあり、１クラス約28名で全校生徒168名の比較的小規模な学校である。

Exploris（探検家）の名前のように各学年の先生を中心に常に実験的に様々な教材・題材に取り組んでいる。

各学年の生徒数と教員数

6 th grade 56名（4teachers）
7 th grade 56名（4teachers）
8 th grade 56名（4teachers）

2．授業を通して

(1)　ある一日の授業を通して

一日の授業のスケジュールは学年担任の４名の先生で考えられるので、学年によって時間の配分などを含めたスケジュールは各学年に任されている。観察した８月21日の８th gradeの一日を追ってみた。

①ABC News

一日の始まりは ABC News である。２クラス合同で実施されており、一日のスケジュールの確認、生徒のスピーチ、一日の学習についての質問が行われた。ここで生徒一人ひとりが今日は何をするべきなのかを明らかにしている。

②Prime Group

学年を４つのグループに分けて教師が一人ずつ担当している。学年の大きな「テーマ」は教師スタッフが設定し、細かな「課題」は生徒が設定をしている。現在の「テーマ」は自分の生まれた頃・５歳の頃・10歳の頃の世の中の動きを調べる。というもので、それぞれの興味・関心によって、各時代のファッションや映画、発明などについて研究をしている。生徒達は二人一組でこのテーマに取り組んでいる。途中までのレポートを見させてもらったが、各自が一生懸命に調べていることが伺えた。

8 th Grade Schedule

08：30－08：50	ABC News
08：50－09：20	Prime Group
09：20－10：00	Rotation1
10：00－10：15	Break
10：15－10：55	Rotation2
10：55－11：40	Rotation3
11：40－12：30	Math
12：30－13：00	Lunch
13：00－13：30	Mini-Lesson
13：30－15：00	Global Arts

③Mathematics

学年を3つのグループに分けて教師が一人ずつ担当している。Math の授業では能力　別にグループ分けをしており、学習ペースの速いクラス・普通のクラス・ゆっくりペー　スのクラスという分け方をし、ゆっくりのクラスは TT で授業を進めている。生徒たちは、自分が分からない内容は、理解できるまでよく質問をしている。その質問に対し教　師は質問をした生徒に返すのではなく、復習の意味を含めて全ての生徒に返すという方　法を取っており、全ての生徒が同じ理解度になるような指導が行われていた。

④Mini-Lesson

Mini-Lesson では、学年を2つのグループに分けて教師が二人ずつ担当している。

Computersグループでは、主にタイピングの練習を中心に学習が進められている。教室には14台のパーソナルコンピュータが設置してあり、生徒が一斉にタイピングができないので、半分の生徒は自分がパソコンでタイピングをしたプリントのスペルチェックをしている。

アメリカでは、8 th grade の10月にパソコンの操作についての統一テストが実施される。このテストにパスをしないとHigh Schoolへ進学ができないというものである。しかし、このテストは合格するまで再度実施されており、落とすためのテストではなく、次のステップにトライさせるためのテストである。教師スタッフも合格できることを第一に指導をしているようである。

Grammarグループでは、文法の学習をしている。他の授業でもそうであるが、数学の授業は教科書があり、教科書に沿った指導がされているが、その他の教科については指導する教師が、題材や学習内容を考え指導がされている。

生徒の学習スタイルは、比較的リラックスしたスタイルで、椅子に座りテーブルで学習している生徒がいれば、「Japanese style Table」と呼ばれる脚の短いテーブルで、絨毯に座って学習をしている生徒もいた。

各学年の学習を視察してきたが、どの学年も中心になっているものは、「読み・書き・計算」を重要視している内容となっているようである。この学習を基礎・基本にし、日本でいう総合的な学習につながっていくようである。

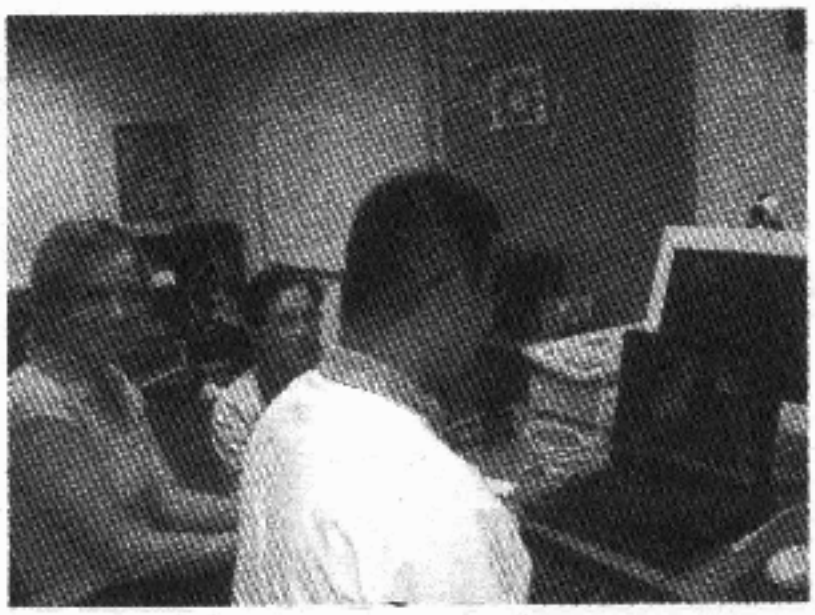
(2)　日本文化の紹介の授業を通して

訪問している期間中に「日本文化の紹介」という内容で各学年で授業を実施した。内容としては、「剣玉（cup and ball）の実演と生徒の体験」である。剣玉は元来ヨーロッパから日本に伝来してきて、現在の日本の形になってきた。広島県（廿日市市）は剣玉の生産量では日本一でもある。また、日本の伝統を何か紹介しながら日本のことを少しでも知ってもらい、生徒とのコミュニケーションがとれるものを考えてみた。これらのことから、Exploris M. S. の生徒に剣玉遊びを実際に体験してもらいたいと思い実践してみた。

授業は終始生徒の興味は剣玉に釘付けとなっていた。剣玉は五個ほど日本から持っていき、各クラスとも5つのグループに分かれての練習となった。古くからの日本の子ども達の玩具ではあるが、生徒達は一生懸命剣玉遊びに没頭してくれた。以上のように姉妹校である広島大学附属東雲中学校のある日本という国の文化に触れていくことは、お互いの国を理解するという意味においてもとても重要なことであると感じた。

3．テレビ会議システムの実施

昨年度の姉妹校提携の際に、具体的な取り組み内容として「テレビ会議システム」を活用した交流が計画された。ハード面や時差などの関係により実施が遅れていたが、今回の訪問を機会に附属東雲中学校と Exploris M. S. の間で実際に通信が可能かテストをすることとなった。2002年8月21日（水）午後7時〔日本時間8月22日（木）午前8時〕から約2時間通信をした。地球のほぼ反対側との通信なので映像と音声に若干の差が生じたものの通信は可能であることが実証された。



しかし、途中でビジー状態になることもあったので改善策が必要と思われた。このことをMicrosoft社に訪ねたところ、「Net-Meeting」だけの通信でも可能ではあるが、「MSN-Messenger」を起動させて、その後「Net-Meeting」に入っていき、通信を始めた方が快適な通信ができるということが分かった。このことにより、問題は解決できるっことが判明した。

「テレビ会議システム」に必要な機器とソフトウェアについては以下を参照して下さい。

通信に必要な機器・・・・・・・・
- ○Windowsがインストールされているパソコン
- ○USB接続の可能なテレビカメラ
- ○パソコンに接続可能なマイクロフォン

通信に必要なソフトウェア・・・
- ○Net-Meeting
- ○MSN-Messenger

3．姉妹校調印とその経緯

2001年7月8日（日）附属東雲中学校（体育館）でExploris M. S. との姉妹校提携の調印式が行われた。

本校は、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに1999年度より参加し、一昨年の夏にExploris M. S. から先生（Mr. Eric Westendort）が派遣されたことをきっかけに、生徒の電子メールや電子掲示板による意見交換などの交流が始まった。そして、昨年度の春に本校教官がExploris M. S. を訪問した際に姉妹校提携の話がもち上がり、昨年度の夏、再び2名の先生（Ms. Juliana Thomas Ms. Jenne Scherer）の来日を機会に具体的に姉妹校提携の調印となった。

そして、今年度の夏〔2002年8月22日（木）〕に私がExploris M. S. を訪問した際に、サインセレモニーの開催となった。サインセレモニーの会場は、Exploris M. S. に隣接されている、Exploris Museum の中のホールで行われた。グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトのディレクターであるドン・スペンス先生（ノースカロライナ大学教授）、日本側コーディネーターの神山　貴弥先生（広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター）の出席もいただき華やかで厳粛な雰囲気であった。

また、サインセレモニーではExploris Museumの館長（Ms. Anne Bryan）が直接サインをされることで、Explorisのサインセレモニーという非常に重要なイベントであるということが再認識されたセレモニーであった。当日は、平日にもかかわらず会場には多くの保護者の方の参列され、サインセレモニーを祝った。

4．今後の交流計画

今回の訪問でテストしたテレビ会議システムを実際に運用して今後の交流を進めていくことができる。しかし、日本とアメリカでは13時間という時差があり、この方法では頻繁に交流することは困難な面もある。

そこで、情報の発信として本校のwebページの英語版を充実させ、本校の学校行事や生徒会行事、各教科の必修・選択授業の報告や総合的な学習の研究成果の発表などをwebページに掲載し、それをExploris M. S.の生徒に閲覧してもらい、意見交換をすることから始めていきたい。その場合情報のやりとりや意見交換などは、今まで同様電子メールを使用したり、Summary Conference で紹介があった「MOJIKO（モジッコ）」を活用していきたい。また、生徒間の情報交換や作品交換だけではなく、実際に生徒間同士の行き来（ホームスティ）ができればと思う。

参考資料１　調印式スケジュール

EXPLORIS-SHINONOME PARTNERSHIPCELEBRATIO

August 22, 2002

10 : 30	students being to walk over
10 : 40	students in place
	Ibis gives general welcome
	Ibis introduces song by 6th graders
10 : 45	song by 6th graders
10 : 50	welcome by Jenne
10 : 52	Juliana's power point presentation
11 : 00	Harrison M introduces busu presentation
	busu performance
11 : 08	7th grade students speak about pen pals : Ali ; Tyrone ; Alex Wilson ; Elizabeth Deerhake
11 : 15	Axel speaks about cranes
11 : 18	Ann Bryan speaks
11 : 22	Yanagihara sensei self-introduction, speech
11 : 25	signing
	6th graders present 1000cranes (as adults sing, crane bearers and drummers proceed)
	Yanaguhara accepts gift
	Jenne closes

日本とアメリカの学校における情報教育の比較研究
－広島大学附属東雲中学校と Exploris Middle Schoolの比較を通して－

広島大学附属東雲中学校　教諭　　柳　原　弘　典

(1)　はじめに

日本の学校教育にコンピュータが導入され始めたのは、約15年ほど前からであり、技術・家庭科の授業に「情報基礎」領域が新しく導入されたのは平成元年３月15日の学習指導要領の改訂により選択領域という形での導入によるものであった。この学習指導要領の改訂に伴い、日本の各中学校ではコンピュータ教室の整備が進められてきた。現在では全ての中学校に生徒が使用可能なコンピュータが整備されている。

しかし、日本での情報教育の歴史は浅く、コンピュータの施設や設備の面でもIT先進国であるアメリカの現状を知ることで今後の情報教育の参考にしていきたいと考えている。

また、Exploris M. S. の生徒と本校の生徒のコンピュータに対する使用経験・使用する上での意識や使用実態についての比較をすることで、研究の糸口を探ることができたらと考えている。

(2)　研究の概要

①　研究の目的

日米の中学生におけるコンピュータについての使用経験やその実態、使用する上での意識などを調査・比較する。また、米国のコンピュータ機器の整備状況を調査し、今後の情報教育のあり方を探る。

②　研究の方法

ア．両校の生徒にコンピュータについての使用経験などのアンケートを取り、状況を分析する。

イ．アメリカの小・中・高校のコンピュータ機器の整備状況を調査する。

③　現地調査の日程

日　　時	場　　所	内　　容	関係者・関係機関
8/19（月） 8：30～ 15：30	Wahl Coates Elementary School	ウォルコーツ小学校を訪問	Dr. Don Spence
	Elmhurst Elementary School	エルムハースト小学校を訪問	
		（昼食）	
	South Central High School	サウスセントラル高校を訪問	
8/20（火） 8：30- 9：20 9：20- 9：40 9：40-10：15 10：15-10：30 10：30-12：00 12：00-12：30 12：30-13：40 13：40-14：50 14：55-15：00 15：00-16：00	Exploris Middle School 6th gradeの教室 学校前の公園 Exploris Middle School 6th gradeの教室	6th grade 授業参観 meet staff/math community meeting prime group meeting break team planning question and answer time with teachers lunch practice Japanese song 「上を向いて歩こう」合唱 「日本文化の紹介」授業 （剣玉の紹介と練習） wrap up and dismissal 6th gradeの先生と懇談	Dr. Don Spence Ms. Mari Maruyama Ms. Jenne Scherer Ms. Yosiko Iwashima

8/21（水） 8：30- 8：50 8：50- 9：20 9：20-10：00 10：00-10：15 10：15-10：55 10：55-11：40 11：40-12：30 12：30-13：00 13：00-13：30 13：30-15：00 15：00-16：00 16：00-17：00 19：00-21：00	 Exploris Middle School 8th gradeの教室 Exploris Musium Exploris Musium Exploris Middle School 8th gradeの教室	8th grade 授業参観 ABC News Prime Group Rotation1 「日本文化の紹介」授業 （剣玉の紹介と練習） Break Rotation2 「日本文化の紹介」授業 （剣玉の紹介と練習） Rotation3 「日本文化の紹介」授業 （剣玉の紹介と練習） Math Lunch Mini-Lesson Global Arts IMAXの見学 （制御室の見学） 博物館の見学 校内コンピュータ機器とシステムの説明 インターネットを利用したテレビ会議システムのテスト （附属東雲中学校：三桝教諭との通信）	Mr. Frank Ms. Beth Mr. Dave Ms. Karen

(3) 研究の結果と考察

① 東雲中学校（日本）とExploris M. S.（アメリカ）の生徒のコンピュータについての調査と分析について

両校生徒のコンピュータの使用経験や使用目的などについてアンケート調査という方法で実施した。調査対象は附属東雲中学校の生徒230名とExploris M. S.の生徒155名である。

最初に生徒が初めてコンピュータを使った年齢について調査した。表1を見てみると、アメリカでは5歳までが一つのピークであるのに対して、日本では9歳までが一つのピークとなっている。また、アメリカでは8歳までに約90%の生徒がコンピュータの使用経験があるのに対して、日本では12歳にならないと90%に達成しない。

この背景には、表5「自分専用のコンピュータ保有率」や表6「家庭でのコンピュータ保有率」の日米の差にも現れているように、家庭でコンピュータに触れる機会の有無と関連していると思われる。

次に、学校教育の現場で生徒達は、何学年でコンピュータを使った授業が始まっているのかについて調査した。表2を見てみると、アメリカでは幼稚園の時点ですでに15.2%の生徒が幼稚園の活動の中でコンピュータを取り入れており、小学校の二年生の時点で約50%以上の生徒が授業の中で利用している。これはNC州GreenvilleのElmhurst Elementary Schoolの現地視察でKindergarten classの授業見学をした時にも、コンピュータを取り入れた授業をされていた。日本では小学校四年生の時点で約50%を超える生徒がコンピュータを利用した授業を受けている。しかし、今回の小学校の指導要領改訂に伴う各校のコンピュータ機器の整備により、低学年化すると思われる。

コンピュータの主な使用目的では「学習のため」と答えた生徒に差異は見られなかった。しかし、「遊びのため」と答えた生徒はアメリカでは24.5%、日本では41.3%という結果になった。日本の生徒の「学習のため」よりも「遊びのため」の方が多いのは、コンピュータゲームやネットサーフィンなどの使用が多いと考えられる。また、アメリカでは表7でも分かるように、メールアドレスの保持者は約90%あり、情報のやりとりを電子メールで行っていると考えられる。私が訪問したExploris M. S.では、担任と生徒間の個人ノートを電子メールで行っているという実践がされていた。

生徒が学習や生活をする上で、コンピュータの必要性の感じ方について調査した。どちらの調査も、アメリカの生徒の方が必要性を感じている。このことは、表1の調査結果で現れているように、コンピュータ操作の経験長さが要因の一つであると考えられる。

最後に、今後のコンピュータ使用の積極性についての調査をした。アメリカの生徒は98.7%の生徒が今後、積極的にコンピュータを使用していくと答えているのに対し、日本の生徒は約80%の生徒が「はい」と答え

表1 「初めてコンピュータを使った年齢」(%)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳
アメリカ	0.0	2.5	1.9	6.3	20.9	24.1	17.7	12.7	5.7	3.2	0.0	1.9	3.2
日　本	0.4	0.0	0.4	1.3	1.3	2.7	16.0	10.7	13.8	18.7	16.0	12.9	5.8

表2 「学校の授業で初めてコンピュータを使った学年」(%)

	幼稚園	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
アメリカ	15.2	26.6	24.7	16.5	8.9	3.2	5.1	0.0	0.0	0.0
日　本	1.8	12.4	6.7	15.1	20.0	24.4	12.4	7.1	0.0	0.0

表3 「コンピュータの主な使用目的」(%)

	学習のため	遊びのため	メールのため	その他
アメリカ	38.3	24.5	21.6	15.0
日　本	38.2	41.3	16.9	3.6

表4 「コンピュータは学習や生活に必要か」(%)

	学習に必要か		生活に必要か	
	はい	いいえ	はい	いいえ
アメリカ	98.7	01.3	94.3	5.7
日　本	90.2	9.8	81.3	18.7

表５　「自分専用のコンピュータ所有率」

	はい	いいえ
アメリカ	38.3	
日　　本	38.2	

表６「家庭でのコンピュータ所有率」

	0台	1台	2台	3台	4台以上
アメリカ	0.0	35.4	27.2	21.5	15.8
日　　本	9.8	46.2	27.6	10.7	5.8

表７「コンピュータ使用の積極性」

	はい	いいえ
アメリカ	98.7	1.3
日　　本	82.7	17.3

表８「メールアドレスの所有率」

	はい	いいえ
アメリカ	89.2	10.8
日　　本	48.9	51.1

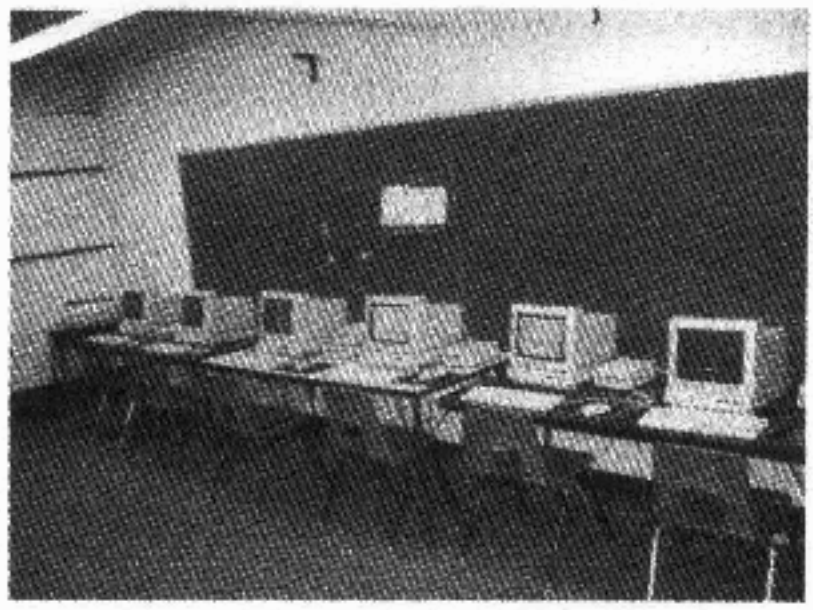
ているのに止まっている。この結果は、表４の調査結果に一致するのではないかと考えられる。

②　アメリカのＩＴ関連機器の施設・設備の状況について

私が、ノースカロライナ州に滞在している間、４校（ウォルコーツE. S.・エルムハーストE. S.・サウスセントラルH. S.・エクスプローリスM. S.）の学校を訪問した。

いずれの学校でも共通していることは、各教室には複数（２台～14台）のコンピュータ（プリンタやイメージスキャナを含む）が設置してあり、なおかつメディアセンターやライブラリーセンターには数十台のコンピュータが設置してある。これらのコンピュータは生徒がいつでも自由に利用できるようになっており、どのコンピュータもインターネットに接続できるようになっていた。

また、メディアセンターが各校とも充実しており、図書・コンピュータ・ビデオなどの情報源や媒体を一括管理している。これらのものは全てそれぞれの専門の教職員がメンテナンスを含めて管理をしている。完全な分業制と取っているようである。



③アメリカの情報教育について

ノースカロライナ州ではKindergarten classから授業の中にコンピュータを取り入れた学習が行われている。小さいときからコンピュータに触れさせることをしており、情報を扱う上でのモラル教育も並行して教育されている。早くから教育を始めることで、情報モラルも徹底されると思われる。

ノースカロライナ州では、8 th gradeの10月に州で統一のテストが実施されている。その内容はコンピュータの機器についてと基本操作やWORD・EXCEL等の応用ソフトウェアの操作方法などである。このテストに合格しなければ高校への進学ができないシステムになっており、合格するまでテストを受けなければならないということである。コンピュータの授業では、このテストに合格させることを前提に授業が進められているということである。

(4) 今後の展望とまとめ

アメリカの生徒と日本の生徒では、コンピュータについての使用経験に差が出ていた。このことは、コンピュータが各家庭や学校教育に普及してきた過程にあると考えられる。コンピュータの普及は日本よりアメリカの方が先進的に進められており、このことがアンケート調査の差として現れていると考えられる。このことは、日本の家庭や学校教育の中でコンピュータに触れることが多くなれば徐々に差がなくなっていくのではないかと考えられる。また、使用するときの意識や積極性については、学校教育の中で、多くの教科や分野・領域で使用する機会を多くすることで変化が見られるのではないかと考えられる。

コンピュータ機器の施設・設備については、物的にも人的にも日本は随分遅れていると思った。現在の日本の学校では、ようやくコンピュータ教室の整備が充実してきているが、コンピュータ教室に20台～40台設置されている程度が現実である。また、生徒が使いたいときに自由に使えるコンピュータを設置している学校は非常に少なく、インターネットの検索にも、必ずと言っていいほどフィルターがかかっており、本当に調べたい内容が探せないといった弊害もある。

また、日本ではコンピュータ教室や機器の管理については、教職員が教科授業や公務分掌などの仕事に従事しながら、校内でコンピュータ機器に詳しい教員が管理をしている。そのため、一部の教職員に負担かかるのが現状である。

今回の研修でいろいろなことを学ぶことができた。これらのことを今後の情報教育を実践していく上での参考にし、研究を進めていきたい。

グローバル・パートナーシップの展開
－エルムハースト小学校とノースウエスト小学校の訪問を通して－

東広島市立平岩小学校　教諭　　田　中　宏　憲

(1)　はじめに

グローバルパートナーシップスクールプロジェクトは、今年で３年目を迎える。しかし本校にとっては、今回が初めての参加となる。言い換えれば、本プロジェクトにおいてなんら実績を残していない。そこで、グローバルパートナーシップを展開していくにあたって、２つのことを考えた。

１つは、アメリカ（ノースカロライナ州）の小学校の特徴をつかみ、日本の小学校との比較を通して、相手校にそれを伝えるということである。もう１つは、継続的な交流を可能にするためのキーパーソンを見つけるということである。

(2)　アメリカ（ノースカロライナ州）の小学校の特徴

ここでは、９つのキーワードを挙げて、アメリカ（ノースカロライナ州）の小学校の特徴を整理する。

・明確な目標

「学校は何をするところなのか」という問いに対して、明確な答えを持っている。アメリカ（ノースカロライナ州）では、「学校は基礎学力をつけるところである」となる。それは、具体的な数字となって表されている（実際に、エルムハースト小学校のベイリー校長はデータを示しながら説明してくれた）。キャラクター・オブ・エジュケイションと題して心の教育（ソーシャル・スキルの学習）も展開しているが、第一の目標ではない。特に躾などは、家庭教育に負うところが大きい。それに対して日本の学校は、複数の目標が並列的に扱われており、何もかも行おうとする傾向にある。

・結果主義

「The ABC plus」という教育改革プランに基づき、学校が数値（州統一テスト）をもって５段階で評価される。また、教師も、州単位や郡単位で表彰される（「TAECHER OF THE YEAR」）。このことについては、日本において賛否両論あると思うが、結果に対して責任を持つという姿勢は学ばなければならない。

・役割分担

学校の目標だけでなく、教師の役割も明確である。各教科、言語、道徳、生徒指導、メディア、個別学習指導、学級事務、思考力養成など、それぞれの教師が、その専門性を生かして指導にあたっている。ただし、教師間でどの程度の連携をおこなっているのかは、はっきりしなかった。日本の小学校では、このほとんどを学級担任が行っている。多くの教師によって子どもたちを見ていくという姿勢は大切にしなければならない。

・危機管理

アメリカの小学校（ノースカロライナ州）を訪れて最初に気になったのは、休憩時間子どもたちが外で遊ばないということである。聞くところによると、けがをさせてはいけないということであった。日本の小学校から見ると、やや過保護な印象を受ける。同じようなことが、理科の時間にも言える。Elementary Schoolの段階では、実験など一切行わないということであった。考えてみると、通学方法にもこのことが当てはまる。子どもたちのほとんどが、スクール・バスかマイ・カーで通学する。徒歩で通学する児童は、きわめて少ない。確かに通学区域の広さにも関係していると思われるが、ここにも危機管理意識が見え隠れする。

・時間の弾力的運用

学校としてのカリキュラムは存在するものの、時間割（日程）については学級担任が自主編成を行っている。休憩時間なども各学級で確保している（休憩時間が統一されていないので、他の学級の迷惑にならないよう過ごしている）。

・指導法のマニュアル化

結果主義を貫いているので方法は各教師に一任されているのかと思えば、そうではない。特に、Readingについては細かいステップを明記したマニュアルが存在していた。「The ABC plus」の影響がここにも見られる。マニュアルの作成は、各学校の代表が集まって行われたり、民間企業によって行われたりす

る。

・メディアリテラシー

教室にパソコンがあり、学校にメディアセンター(図書館とパソコンルームがドッキングしたようなもの）があるのが、当たり前の状態である。さらに、ノースウエスト小学校では、パソコンルーム（パソコン30台)や貸し出し用ノートパソコンなどが備わっていた。日本では、2005年までにすべての教室にパソコンを２台、プロジェクターを1台用意する計画がある。

・PTAによる保護者啓発

PTAが、学校のカリキュラムを公開し、基礎学力の育成に向けて保護者の役割を考えさせている。また、図書館やコンピュータの使い方を教えるために教室を開いている。本校でも、今年度からシラバス（年間授業計画）を全保護者に配布し理解を求めたが、それは職員が行っている。

・ボランティア

教職員の人数が多いだけでなく、保護者によるボランティアの数もかなりにのぼる（年間4000時間授業に加わる)。アンケートを用いて保護者の職業や趣味を調査し、データベースで管理している。本校でも、生活科や「総合的な学習」の時間、クラブ活動において、保護者や地域の方々（マイタウンティーチャー)の協力を得ることがあるが、時間数は少ない。

(3) コンタクトパーソンの存在

今回の訪問では、Suzanne Hachmeister 氏（エルムハースト小学校）と Tim Decresis氏（ノースウエスト小学校）の２人に大変お世話になった。この２人が存在しなければアメリカ（ノースカロライナ州）の教育に関する情報量も半減したであろう。

お互いの学校について言葉を交わしたものの、私の英語の能力が不十分なため、ほんのわずかしか伝わっていないと思われる。その中で、心に引っかかった言葉がある。それは、「どうして君は私の学校と提携したいのか」という Tim Decresis 氏の質問であった。私が訪問前に考えていたことは、とにかくどこかの学校のある先生とコンタクトがとれるようになればという漠然としたものであった。彼の核心に迫る質問に一瞬うろたえた。

提携を考えていくのであれば、相手の学校のよさを具体的に指摘できる力量が必要となってくる。それと同時に自分の学校のよさをPRすることのできる力量も必要となってくる。

E-mailアドレスを交換することができたので、今後もお互いにパートナーシップの窓口となることができるであろう。継続的な交流を可能にする第一の条件はface to faceで人間関係を構築することであることを、２人との出会いを通じて実感した。

(4) 今後の交流計画と課題

本校の国際理解教育の特徴は、ゲストティーチャー（主に留学生）やマイタウンティーチャー（主に地域の方々)との交流を軸にして展開しているところである。

これらの交流は、コミュニケーション能力を高めたり、学習を深めたりするうえで、たいへん有効である。しかし、継続的に交流していくことが難しいという課題を抱えていることも事実である。また、他国の小学校と姉妹校締結を行っていないため、児童間交流というものが存在していない。

そこで、お互いの学校で学習したこと（主に「総合的な学習」の時間や学校行事）をもとに交流できないかと考えてみた。

・児童間の交流

できることから始めるという考え方に立てば、パソコン上の交流となる。メール交換をはじめ、お互いの学校のホームページの閲覧、おすすめWEBサイトの紹介などが考えられる。作品交換やビデオレターの郵送などもすぐに取り組めるものであろう。

・教師間の交流

教材開発（国際理解教育や環境教育、福祉教育、情報教育など）や指導法の研究（それぞれの持っているマニュアルを紹介しあうなど）が、その中心となるであろう。

(5) おわりに

２週間にわたってアメリカ（ノースカロライナ州）の教育事情を拝見した。滞在すればするほど愛着がわき、質問したいことが増えていった。今回の訪問が単なるイベントに終わることなく、グローバルパートナーシップのスタートとなるよう、具体的な実践をイメージしていきたい。